高知県立文化施設事業評価委員会（平成 28 年度事業） 評価表　　高知県立坂本龍馬記念館

龍馬を求める人々の思いに応えるとともに、龍馬の中核施設としての機能充実を図る

要求水準－収集・保存

収集方針に基づき龍馬に関する資料を収集し、適切に保存する

評価項目
（1） 他の博物館との連携や資料所有者との信頼関係の構築に努め、資料の充実を図る
（2） 資料の整理・分類、点検・劣化防止等の処置を適切に行う

状 況 説 明
・29 年１月に県が発表した新発見の龍馬の手紙について、真贋の判定や展示に際し、京都国立博物館や下関市立歴史博物館、福井市立郷土歴史博物館、高知城歴史博物館との連携・協力関係を深めた。 ・「漂巽紀略」（ジョン万次郎漂流記）の古写本、戊辰戦争関係の錦絵の 2 点の資料を購入、19 点の寄贈資料を受け入れた。 ・収蔵環境については、引き続き日常的なチェックにより、収蔵庫内の温湿度管理に目を配り、資料の適切な保管を行った。

評 価	理 由
B	・多くの県内外文化施設と連携しており、リニューアル後を見据えた協力関係を築いている。 ・「漂巽紀略」の古写本を購入するなど、今後の展示を考えた資料の収集を行っている。 ・資料台帳に記載のない資料が見つかったため、リニューアルに向けて資料整理が必要。

【ご意見等】

要求水準ー調査・研究
龍馬に関する調査研究を進め、その成果を公開する

評価項目
（1） 職員の専門性の向上を図るとともに、龍馬とその関連分野に関する調査研究を進める
（2） 調査研究の成果を、企画展や広報媒体などを活用し、広く公表する

状 況 説 明
・蝦夷地開拓を目指した龍馬や、北海道へ移住した坂本家について、「高知の移民文化発信プロジェクト」に参加することによって、より深い考察を行った。 ・薩長同盟から 150 年という節目の年を迎えて、同盟の成立過程や、意義に関する再検証を行った。 ・調査研究の成果を年間4本の企画展により広く公開した。 ～新国を拓き候～「海を渡った“龍馬”たち」展 「龍馬の評価」展 ー坂本龍馬の実像は？ー 「再検証・薩長同盟」展 坂本龍馬記念館25年のあゆみ展 ・県外巡回展「没後１５０年・高知県立坂本龍馬記念館巡回展　土佐から来たぜよ！坂本龍馬展」を岡山県の林原美術館で開催した。

評 価	理 由
A	・「高知の移民文化発信プロジェクト」や薩長同盟の再検証を通して、職員の専門性の向上を図った。 ・研究の成果を年間４本の企画展だけでなく、県外巡回展も開催することで広く公開した。

【ご意見等】

要求水準ー展示･公開
土佐の気風と幕末維新の息吹が感じられる魅力ある展示やサービスの提供により、龍馬の業績を伝える

評価項目

（1）　「桂浜」や「龍馬像」に隣接する立地条件を生かし、来館者の増加につなげる施策を戦略的に展開することにより、5年間で70万人以上の来館者を目指す

（2）　来館者に龍馬の志や生涯を深く理解してもらえるよう、幕末史や土佐の郷土史のなかに龍馬を位置づけた展示を行う

（3）　龍馬に関する専門施設として、一人ひとりの疑問に答えるレファレンスサービスや、学芸員によるギャラリートークなど、来館者の理解が深まる取り組みを充実させる

状 況 説 明
･新館建設工事に伴い第5回レッツゴー！ハンドインハンドは館内で開催し、参加者約 350 人であった。 ･28 年度の入館者数は、前年度比 88%の 131,280 人となった。 ･手紙の展示は、手紙の活字、現代語訳、解説の3段手法で展示するなど工夫している。 ･常設展示スペースでは、幕末史や土佐の郷土史のなかに龍馬を位置づける展示ができないため、企画展で採り上げて補うなど、来館者に深く理解してもらえる展示に努めた。 ･学芸員はこうちミュージアムネットワーク他外部団体主催の研修会･見学会、学会や研究会などに参加して知見を深め、解説員は龍馬や幕末史の知識を深める努力により、来館者サービス向上に努めた。 ･団体客への解説回数（延べ）は、学芸員 104 回、解説員 20 回、計 124 回となった。 ･解説の要望には可能な限り対応し、学校の来館時にクラスごとに分けて解説をするなど来館者の理解が深まるよう努めた。 ･レファレンスは、来館･電話･メールでの回答はもとより、照会者への訪問なども行いながら迅速かつ正確な対応を心がけている。 ･入館者にアンケート用紙を配布し、自由に記入していただいた。用紙は閉館後に回収、館長がチェックし、必要に応じて個別に回答するなど、適切に対応した。 ･9名のカルチャーサポーターが、館広報誌「飛騰」や企画展･イベントチラシ類の発送、こども教室の作業補助、近江屋復元での解説などを行った。

評　価	理　由
B	･積極的なイベントの開催や、広報活動等が認められる。 ･前年度に比べて入館者数は減少したが、年間目標である 12.5 万人を達成した。 ･展示方法の工夫、解説要望やレファレンスへの対応など、来館者の理解を深める取り組みを行った。 ･学芸員、解説員、カルチャーサポーターともに資質の向上に努めることで来館者や龍馬に興味を持つ全国の方々へのサービス向上につながった。

【ご意見等】

･ハンドインハンドについて、館内で手をつなぐのと太平洋を見ながら手をつなぐのではスケール感が違うため、今後も館内ではなく、館外で実施してほしい。

要求水準ー教育・普及
次代を担う子どもたちをはじめ、県民に龍馬について正しく理解してもらうため、教育普及活動の充実を図る

評価項目
（1） 学校との連携による出前授業の実施や校外学習活動の受入を積極的に行うなど、子どもたちの幕末維新や土佐の歴史を学ぶ機会を充実させる
（2） 龍馬に関する講座やシンポジウムの開催など、龍馬への県民の理解が深まる取り組みを充実させる

状 況 説 明
・県内の幼保育園、小中高校や龍馬の子孫ゆかりの北海道浦臼町の中学校など年間 27 件、1,551 人の児童生徒をはじめ教職員、保護者へ向けた出前授業を実施した。 ・公民館や老人大学などでの講演や解説などにも取り組み、県外でも浦臼町や釧路市の住民の方々を対象とした講演や北海道大学での講演を行った。 ・第４回夏休み子ども・龍馬フォーラムは、ワークショップ形式で開催し、小中学生 18 人の参加があった。 ・第８回現代龍馬学会発表会、第４回夏休み子ども・龍馬フォーラム、第５回レッツゴー！ハンドインハンドなど龍馬や幕末維新の歴史、記念館に対する県民の理解と関心を広げるための取り組みを行った。

評 価	理 由
B	・学校と館の連携による学習活動を多く実施した。特に出前授業は、認知度が向上しており、学校現場で活用されている。 ・「夏休み子ども・龍馬フォーラム」は、歴史学習にとどまらず、龍馬を通じた人材育成の場ともなっている。 ・現代龍馬学会、夏休み子ども・龍馬フォーラム、レッツゴー！ハンドインハンドなど新館建設工事に伴う制約がある中、龍馬の理解が深まる取り組みを継続して実施した。

【ご意見等】

要求水準ー広報
龍馬に関する情報を全国に発信し、新たなファン層の拡大とリピーターの定着を図る

評価項目

（1） ホームページを活用し、より多くの方に龍馬を知ってもらうとともに、来館への動機づけにつながるような情報発信を行う

（2） 来館者が龍馬に宛てて手紙を書く「拝啓龍馬殿」など、来館者の思いをくみ上げる取り組みを継続して行うとともに、その内容を活用し効果的な広報を行う

状 況 説 明
・館の情報発信は、館広報誌「飛騰」とともにホームページでも行っており、開館時間の延長期間や企画展・イベント情報などを常時発信した。 ・専門的な技術研修を受けた職員により、ホームページを一部リニューアルし、館の休館にかかる情報発信を行った。 ・「拝啓龍馬殿」へのメッセージは、開館から 25 年を迎え、1万7千通に迫ろうとしている。 ・来館者への出口調査は定期的に、アンケートは閉館後に確認を行い、入館者の動向、館への要望や期待、改善点などの把握に努めている。

評 価	理 由
B	・ホームページや「飛騰」を活用し、来館の動機づけになるよう情報発信を行っている。 ・「拝啓龍馬殿」、出口調査やアンケート等により、来館者の声をくみ上げる努力が認められる。

【ご意見等】

要求水準ーその他

評価項目
県内外の他の博物館等と連携した事業の充実により、県民サービスの向上を図る

状 況 説 明
・高知県立美術館を中心に県内外 10 ヶ所の文化施設が参加した「海を渡った高知スピリット　高知の移民文化発信プロジェクト」に参加し、龍馬や、甥・直寛、その孫・直行らを展示で採り上げた。 ・薩長同盟の再検証を行った企画展では、中岡慎太郎館と協力し、共通図録作成など連携した。 ・初の試みとなる県外巡回展示を県外の文化施設と連携して開催した。 ・京都国立博物館をはじめ、山口、長崎、鹿児島、四国各県の博物館など龍馬ゆかりの県外施設との一層の連携交流を図った。 ・北海道浦臼町と連携し、北海道で初めての当館資料の展示となる「北の龍馬たち」展を開催するとともに、龍馬に関する出前授業や講演会を行うことができた。 ・県外巡回展を開催した岡山県の林原美術館では、年間入館者の約2分の1近くとなる 9,700 人が入館し、会場での展示解説では、入場制限を行うほど多くの来場があった。 ・県内外の他の博物館等との連携が進むことで職員の専門性の向上、視野の広がりが見られた。

評　価	理　由
A	・県内外の他の博物館等と連携した事業の充実が認められる。 ・積極的な連携に努めており、今後、展示等の事業の充実が期待される。

【ご意見等】

要求水準ー施設管理
施設及び設備の適切な保守管理をとおして、故障や事故のない運営を行う

評価項目		
（1）適切な管理運営の確保	社会的責任	・法令等の遵守　・個人情報、情報公開の状況
	建物や設備の管理	・点検、修繕の実績　・業務委託の状況
	危機管理	・風水害、火災、地震、盗難等危機管理対策 ・マニュアルの作成　・職員研修

状 況 説 明
・法令及び就業規程等諸規程の順守に努めた。 ・入札記録の閲覧（1件）があり、対応した。 ・機械器具等の保守管理については、関係業者に委託し、修繕を要する箇所はできるだけ速やかに修繕を行うなど、適切な管理に努めた。 ・消防計画に沿った館内組織体制を定め、危機管理マニュアルを作成のうえ職員に周知し、職員の目に付く場所に掲示している。10 月に消防署立会いの下、消防訓練、避難誘導訓練を実施した。 ・地震等の災害に備え、館内にヘルメットの配置や水、簡易トイレ等の備蓄をしている。7月に災害伝言板利用訓練を、3月に地震避難訓練を実施し簡易トイレの組立や備蓄品の点検を行った。

評　価	理　由
B	適正な管理運営が遂行されたと認められる。

評価項目	
（2）利用者サービスの維持向上	・利用者の意見の反映　自己点検、評価の状況　・事故、クレームへの対応 ・職員の専門性の向上　・研修の実施状況　・その他サービス向上の取り組み

状 況 説 明
・入館者全員にアンケート用紙を配付し入館者の意見やニーズの把握に努め、把握した意見は毎月の職員ミーティング時に全員で共有し館の運営に反映させた。 ・利用者サービスについては概ね良好の回答をいただいた。クレーム等については、対応可能なものは速やかな対応を行った。 ・利用者の事故に対しては事故等対応手順を策定し適時適切な対応を行うとともに、事故の再発防止のための措置を図った。 ・財団本部が実施する研修（自主企画研修、接遇研修、普通救命講習、新規採用職員研修）や外部団体が実施する研修（著作権セミナー、国宝・重要文化財防災・防犯対策研修、労働契約等解説セミナー、ホームページ講習）に参加し職員の資質の向上に努めた。 ・少人数利用者、団体利用者、取材来館者への学芸員による解説・案内サービスの提供に努めた。 ・10月の新館建設工事開始以後、警備員を増員し、自動車による来館者への案内・安全サービスの充実に努めた。

評　価	理　由
B	適正な管理運営が遂行されたと認められる。

評価項目		
(3)利用実績	利用実績の状況	・利用状況の分析

状 況 説 明
・企画展を4回開催し、来館者数は全体で約 131 千人(前年度比11．6%減)であった。「坂本龍馬の実像は？龍馬の評価展」(7月上旬～11月上旬)が約 54 千人と最多であった。休館開始時期の変更に伴い開催した「収蔵資料でふりかえる・坂本龍馬記念館25年のあゆみ展」(1月上旬～3月)は約 22 千人の集客であった。 ・来館者の傾向は、昨年度同様、県外来館者が主で県内来館者は5%未満であった(館での申告制による調査結果)。 ・新館建設工事が 10 月から開始され駐車場(バス4台・乗用車 50 台)が使用不可となり、臨時駐車場(乗用車 15 台)の使用となったことなどの影響を受けて、前年度に比べて入館者が減少したが、工事の影響を加味した年間目標を達成した。

評 価	理 由
B	・入館者数は前年度比11.6%減少した。 ・工事の影響を加味した年間目標12.5万人を達成した(達成率105%)。

評価項目		
(4)収支の状況	経営努力	・収入増加の取り組み　・経費削減の取り組み

状 況 説 明
・年間4本の企画展のほか、レッツゴー！ハンドインハンド、夏休み子ども龍馬フォーラム、一絃琴コンサート等のイベントや教育普及事業を実施することで来館者増への取り組みを行った。 ・岡山県で巡回展示を実施し県外からの来館者増につなげる取り組みを行った。 ・高知県観光コンベンション協会や観光関連業者との連携、新聞・テレビ・ラジオ・観光情報誌等の多様な媒体を活用した広報に努め来館者増を図った。 ・各種団体が実施するスタンプラリーへの参加や現代龍馬学会総会を通じて、館の積極的なPRに努め来館者増を図った。 ・ゴールデンウィーク、よさこい祭り、お盆期間の開館時間の延長や年末年始の開館を実施し、来館者増を図った。 ・デマンド警報機による節電対策、不要な電灯の消灯、空調機の温度管理、扇風機の活用、コピー時の裏紙の活用など経費節減への取り組みを行った。

評 価	理 由
B	・来館者増につなげる取り組みに努力は認められるものの、新館建設工事の影響もあり、来館者は前年度より減少した。 ・自主財源比率は43.8%となり、前年度の57.1%に比べて大きく減少した。 ・経費削減に努めた結果、収支差額は黒字となり、次年度以降の事業予算に充当する特定費用準備資金を計上することができた。

【ご意見等】

総合評価

評　価	理　由
B	・資料台帳に記載のない資料が見つかったため、リニューアルに向けて資料整理が必要。 ・年間4本の企画展や県外巡回展、各種イベント・教育普及事業を実施することで来館者増への取り組みを行った。 ・多くの県内外文化施設と連携し、リニューアル後を見据えた協力関係を築いている。 ・「漂巽紀略」の古写本を購入するなど、今後の展示を考えた資料の収集を行っている。 ・入館者数の年間目標である 12.5 万人を達成した。 ・現代龍馬学会、夏休み子ども・龍馬フォーラム、レッツゴー！ハンドインハンドなど新館建設工事に伴う制約がある中、龍馬の理解が深まる取り組みを継続して実施した。 ・県外巡回展を開催した岡山県の林原美術館では、年間入館者の約2分の1近くとなる9,700人が入館し、会場での展示解説では、入場制限を行うほど多くの来場があった。 ・自主財源比率は43.8％となり、前年度の57.1％に比べて大きく減少したものの、経費削減に努めた結果、収支差額は黒字となり、次年度以降の事業予算に充当する特定費用準備資金を計上することができた。 以上のことから、概ね要求水準どおりであり、適正な管理運営・事業の遂行がされたと認められる。

【ご意見等】

評価基準

「A」 要求水準を上回る成果があり、優れた管理運営・事業の遂行がされた。

「B」 概ね要求水準どおりであり、適正な管理運営・事業の遂行がされた。

「C」 要求水準に達しない面があり、改善のための工夫や努力が必要。

「D」 管理運営・事業の遂行が適正に行われたとはいえず、大いに改善を要する。